

ゼンマイ

齋藤晴生

「ねえ、サキ。もう告っちゃついなよ」

なんの脈絡もなく、突然そう会話を始めたのは幼馴染の藤前カヨだった。

お昼休みの始まりの合図ことチャイムが学校中に響くとほぼ同時に、彼女は私の前の席の神崎君にどいてもらって、私の目の前に着席した。これはいつものことだから、神崎君もあまりいやな顔もせず席を空けてくれる。

カヨはわざわざどいてくれた彼に目すらくれずに、椅子を回して私の机にお弁当を広げた。何があったのかは知らないけど、カヨは神崎君のことをあまりよく思っていない節がある。そのせいでカヨは彼とは、あまり口を利きたがらない。

「それができたら苦労しないよ」

私はため息まじりに返事をする。

そして横目で神崎君が向かう教室の中心に視線を向ける。視界に入れたのは机を向かい合わせて食事を始めようとしている男子のグループ——各々お弁当やら登校中を買ってきたパンやらを机に出している。その中の一人、久我君を特に注視する。

彼はスポーツや勉強がズバ抜けてできるとか、容姿が特別整っているとかそういったことは一切ない。どこにでもいるごく普通の高校生だ。そんな人だから、女の子からモテるなんて話はいままでに一度も聞いたことがない。

そんな彼に私は片想いしている。……とはいっても、男子とあんまり話すことのない私は、カヨが言うように告白することはおろか、話しかけることすらままならない状況なのだけけれど。

「えー、絶対いけるって、久我君っていかにもモテなさそうだし、サキに告られたりなんかしたら興奮のあまり鼻血吹き出しながらOKするよ」

カヨは冗談めかして言っているが、目が本気だ。彼女の中で久我君はいつたいどんな人間なのだろうか。

「そんなに上手くはいかないって」

私は苦笑いで突っ込みを入れる。そんないまいち乗り気でない私を見て、早くもこの話題に飽きたのか、カヨは唐突にカバンの中から手のひらサイズの犬の玩具を出してきた。

「見て見て、これ昨日私の勉強机の中から発見したの。かわいいいでしょ」

カヨはそう言いながら、犬の横っ腹についているゼンマイをカチカチと巻き始めた。

ちなみに発掘したというのは比喻でもなんでもなくて、本当に彼女の部屋は足の踏み場もないほどにものが散乱しているせいで、ものを探すとすると本当に掘るように探さなければならぬ。

これは多分ほとんどの人が知らない、彼女のかわいい顔からは想像もつかない一面だ。

「微妙。胴体の大きさの割に脚が短すぎるのよ。ダックスフントだってそこまでバランスは悪くないわ」

私は正直に玩具の感想を述べる。

「ふふふ、これを見てもそんなことが言えるかな」

カヨが犬を机の端に置くと、ジジジジ……なんてゼンマイが

回る時の独特な音を上げながら少しずつ前進を始めた。その進み方が胴をくねらせて進むというもので、その動きはイモ虫のように見える。ただ、たしかに必死に前進しようとする姿は少しかわいく見えないことはなかった。

「あ、そうだ、面白いこと考えた」

カヨはもはや自分で動かし始めた犬には目を向けず、大げさに手を打つ。

カヨの集中力が散漫なのは昔からの悪い癖だ。加えてカヨの言う面白いことが、今までに私にとっても面白いことだったことは非常に稀だ。

私は期待もせずに顔を上げる。

「ちよつとサキ、ケータイ貸して」

「なんでよ、自分の使えばいいじゃないの」

「いいからいいから。絶対に面白いし、サキもうれしいから」

私は訝しみながらも、他でもない親友の頼みだからと、渋々スマートフォンを差し出す。カヨは私の手からスマホをむしりとると、慣れた手つきでササツとそれを操作する。おそらく意図的だと思われるが、私の角度からではその画面を見ることができない。

捜査中に何度か私の方をチラチラみた彼女の表情は悪だくみをする幼子のようにだった。

なにもすることがなく、ゆっくりと前進する犬を観察すると暫し、カヨは勢いよく顔を上げた。

「見るがいい！」

カヨは私に、水戸黄門の格さんよろしく突きつけたスマホの画面を見て私は愕然とする。それは見慣れたSNSを利用したメッセージアプリの画面だった。

「明日のお祭り、二人きりで行こう？」

短いメッセージだった。送信者は私、宛先は久我君だ。

私は久我君の連絡先を持っていなかったから、クラスのグループから個人にメッセージを送ったのだろう。

「がんばってね」

私から視線を逸らしたカヨは、両手で胸の前にガッツポーズを作って見せる。

「がんばってね、じゃないわよ。どうしてくれるのよ」

「とーにかーくー、お祭りは明日だからね」

なぜかカヨは不機嫌そうに口を尖らせる。不機嫌になりたいのはこちらの方だ。

そこでちょうど、机のふちでピタッと止まった犬の玩具のゼンマイを、彼女はムツとしたまま巻きなおして再び歩かせ始めた。相変わらず玩具の姿は滑稽ながらも、どこかはつらつとしたものを感じさせた。

久我君は食事中で、まだメッセージには気づいていない様子だった。

あの後、私はカヨのいたずらだったなんて言い出せなくて、結局久我君と二人でお祭りに行くことになった。

彼からの最初の返信が来たのは昨日の放課後だった。

正直なところ断られるだろうと半ば確信していたのだけれど、

彼はその期待を裏切ってきた。それがよかったのか悪かったのかは別として、心のどこかで喜んでる自分がいたのが、カヨにしてやられたようで少し悔しかった。

それから事はとんとん拍子で進み、久我君が集合場所から時間まですぐに決めてくれた。

そして、その集合場所である公園に、集合時間の三〇分前に到着した私はベンチに腰を下ろして、前髪をせわしなく整える。どこかに植わってるのかもしれない。ミカンのような柑橘系な香りがどこからともなく漂ってくる。

もう太陽はすっかり沈んでいるにも関わらずかなり暑かった。今年は例年よりも暑いと言われる気温のせいや、母の浴衣を借りて着てきたせいもあるだろう。

ただそれ以上に、浴衣のせいとも気温のせいともつかない身体の熱さを私は少なからず感じている。

「ごめん。待ったか」

と、久我君は駆け足でこちらにやってきた。

「う、ううん、全然。今来たところだよ」

実を言うと今は約束の五分前だから、私がおここに来てから五分程度が経過している。この二五分間は、私にとって一瞬とも永遠とも感じられた。でも当然、そんなことは口に出すこともなく私はスツと立ち上がる。

「じゃあ、行くか」

「うん」

久我君の声は普段よりやや上ずっているように聞こえた。私

同様、緊張しているのかもしれない。そうならうれしい。

待ち合わせ場所はわざと神社から少し離れた場所にしてある。これは久我君の提案で、神社の近くだと人が多くてなかなか会えないかもしれないから、とのことだった。

特に話すこともなく、無言のまま並んで歩くこと数分。徐々に道端に提灯や灯笼が飾られているのが目に入るようになり、やがて笛や太鼓の音が聞こえてくるようになった。

「なにか食べたいものとかあるのか」

お祭り独特の、おいしいものをでたらめに混ぜたようなおいが私の鼻をついたとき、久我君が聞いてくる。

「うーん、とりあえず一通りお店を見てから考えようかなって。久我君は？」

「俺も見てからかな」

再び二人の間に静寂が流れる。周りから聞こえる、がやがやとして楽しそうな声はノイズと変わらない。

社への一本道は朝の電車くらい人が詰まっっていて、この中にこれから入って行くのかと思うと少し気が引けた。

それでも私の数歩前に行く久我君は、そんなことお構いなしに人ごみの中へ入っていく。はぐれるわけにはいかないから、私もその背中を追いかけて人ごみに入る。

「思ってたよりも混んでるな」

久我君は頭のうしろをカリカリと搔く。

「そうだね」

ついていくだけで精一杯な私は、ただ前に進むことだけを考

えながら久我君を追いかける。道端に所狭しと並んだ屋台を見ている余裕すらない。そもそも人が壁になっていて、私の身長だと屋台はよく見えない。

だから私は、視線を右往左往させる久我君の大きな背中だけを見つめる。

「なにかいい屋台は見つけたか」

「えーと、リングゴ飴とかおいしそうかなって」

全然見えていないなんて言い出せずに、私は適当に答える。

「買いに行くか？」

「ううん、とりあえず上まで行っちゃお」

会話が続かない。私はこうして久我君を追いかけるだけでも楽しいけど、彼はどうかだろうか。恋人でもなんでもない女の子と二人きりで、しかも黙って人ごみを歩く。きつとつまらないことこの上ないだろう。

私たちはただただ黙って前に進む。人の間を縫うように進む。

その動きは、昨日カヨが学校に持ってきていた犬の玩具を思い出させる。そう思うと、すぐそばから聞こえる、お好み焼きを焼く音はゼンマイの音に聞こえなくもなかった。

もしかしたら私たちは、周りから滑稽だと思われるのかもしれない。私にもなんだか今の状況がおかしく思えてきた。

「なにか面白いものでもあったか」

久我君は不思議そうに、半身でこちらに振り返る。

「ううん、なんでもないの」

「そうか」

久我君はまた屋台の選別作業に戻っていった。

何が楽しいとか、何が面白いとかそういうのではない。この状況そのものが楽しいんだ。久我君がどう思っているかどうも、私はこの時間が永遠に続いてほしいと思っっている。いや、願っている。実に自己中心的な考えだ。でもそう思わずにはいられなかった。

私は久我君のことが好きだから。

とその時、数十段の階段とそのでっぺんにある烏居が見えてきたところで、私たちは正面から来た中学生くらいの集団に呑み込まれた。悪気はないのかもしれないけど、彼らは横にひろがって歩いていて道をふさいでいる。

久我君の背中でそれが見えていなかった私は、あまりに突然の出来事すぎて、その集団に押し流されてしまう。

久我君は振り向いて手を伸ばしてくれたけど、私は慣れない浴衣の袖を邪魔されてその手を上手くつかむことができなかった。

——私は大きくため息を吐いた。

久我君とはちよつと前にはぐれてしまつて、もしかしたらここに来れば会えるかもなんて思つたけれど、そんなことはなかった。

これだけ人がいる中で一人の人間を探すのなんて、森で一本の木を探すのと同義だと言つても過言ではない。

私はもう久我君を探すことを諦めて、社の前のベンチに腰掛けた。そしてもう何度目かわからないため息をついたときに

割と近くから声が聞こえた。

「まさかはぐれちまうとはな」

それは意外にも久我君のものだった。

私は声を掛けようと顔を上げると久我君は神崎君たちいつもお弁当を食べているメンバーの中にいた。

久我君はさっきまではなかった楽しそうな笑顔を浮かべている。

それで私は声を掛けることを躊躇した。幸か不幸かあちらは人ごみのせいで、私に気づいていないようだ。

「もったいねーな。鈴音さん絶対お前に告白するつもりだったろ」

「そんなわけねーだろ。あの鈴音さんだぞ。俺なんか気があつたらびつくりだ」

「でも二人だけでお祭りって、それ完全にデートじゃねえか。好きでもないやつを誘うか、普通に考えて」

神崎くんはなぜか悔しそうな表情で、久我君を咎めるように言う。

「でも、俺だぞ？　もし相手が超絶イケメンならそれが普通かもしれないけど、相手はこの俺だからな。しかも鈴音さん、天然ってよく言われてるし、そういうの疎いんじゃないね」

久我君は自分を卑下するようなことを冗談まじりに言っている。

「確かにな……。久我だもんな。鈴音さんも確かにそういうのには疎そうではあるしな」

「そういうことだ」

彼らは顔を見合わせて愉快そうに笑う。なんだか少しバカにされているような気がしないでもない。

「でも、もし告白とかされたらお前どうするつもりだったんだよ」

笑いがやむと、神崎君は久我君に試すような視線を送る。

「そりゃ、いままでそういう経験はなかったからうれしいけど、断ってただろうな」

久我君は困ったように、頭のうしろをカリカリと掻く。私の口からはまたもため息が漏れる。

正直なところ今日、告白してもいいかな、なんと思っていたんだけど、もしそうしていたとしても結果は失敗に終わっていたのだろう。

「そうだよな。お前、藤前派のリーダーなんて名乗ってるもん
な」

神崎君はうれしそうにバシバシと久我君の背中を叩く。

少し前に友達に聞いた話によると、藤前派というのはカヨのファンのことを指すらしい。ちなみに他の派閥は存在が確認されていないとも聞いた。

カヨは昔から結構モテるのだ。彼氏がいないのが不思議だ。とみんなによく言われるみたいだけど、どうやらカヨには昔からずっと好きな人がいるかららしい。それが誰なのかまでは教えてくれなかったけど。

それにしてもまさか久我君が藤前派で、しかもリーダーだっ

たとは夢にも思わなかった。今日一番大きいため息が出る。

「だって、もし俺が鈴音と付き合ったら、神崎は怒るだろう」

初めて聞いたし、いままでまったく気づかなかったけど、口ぶりから察するに神崎君は私のことが好きらしい。でも、神崎君には悪いけど、そんなの少しもうれしくはなかった。

そんなことよりも久我君が私の幼馴染を好きだったことへの驚きの方が大きかった。

そして、昨日のカヨの態度が私の頭をよぎった。彼女が勝手に私のスマホから久我君にメッセージを送ったあと、なぜか不機嫌になっていた。

もしかしたら、カヨも久我君のことが好きなのかもしれない。でも私が彼を好きなのを知っていたから遠慮して、私の後押しをしてくれていたのかもしれない。でも久我君の想い人はカヨなわけだから、本当に手を引くべきなのは私の方ではないだろうか。

一つ悪いことがあると、ものごとの全てを悪い方向に考えてしまう。

ふと顔を上げると、そこにはもう久我君たちの姿はなくなっていた。

「なんか、ごめんね」

代わりに突如として私の隣に座っていたのは、カヨだった。気まずそうに言う彼女は、いったいいつからここにいたのだろうか。考え事をしていると周りが見えなくなる。

「聞いてたんだ。よかったじゃんカヨ。両思いでしょ」

「両想い？ 何の話？」

カヨは眉を寄せて首をかしげる。どうやら本当に私が何の話をしているのかわからなかったらしい。

「だってほら、カヨって久我君のこと好きなんでしょ？」

「え、え？ 本当に何の話？」

もはやカヨは混乱してしまっていた。どうやらカヨが久我君のことが好きだというのは、私の早とちりだったらしい。

やっぱり悪い方へとことを考えすぎていたのだろう。

「でも思ってたよりも元氣そうで安心したよ。実質振られちゃったわけだから、もっと落ち込んでるかと思ってたんだけどね」

「なんていうか、もういいかなって」

気づけばもう、ついさっきまで確かに胸にあったはずの久我君への想いが私の中のどこにも存在しなくなっていた。彼に向いて必死に歩いていた恋心は、ピタッと止まっていた。

「……そっか」

相槌とともにカヨは立ち上がる。そして太陽のような笑顔で、くるりとこちらに身を翻す。その動作に一拍遅れて純白のワンピースの裾がふわりと浮いて、ミカンのような香りが漂ってきた。香水までしているらしい。

「今日はずいぶんオシャレしてきたのね」

「どう、似合うかな？」

カヨはバレリーナのごとく、元氣よくまた回って全身を見せてくれる。

「うん、かわいいよ」

カヨは頬を朱に染める。彼女のこんな表情は長い付き合いだけれど、あまり見た覚えがない。

「サキ、お腹すいた。タコ焼きと、お好み焼きと、かき氷おごって」

照れ隠しのつもりなのか、命令するように早口にそんなことを言うカヨに対して私は、いままでにない不思議な気持ちを感じていた。

「あと、綿あめとラムネも」

子供のようにはしゃぐ彼女は、私の手を握って立ち上がらせようとしてくれるので、それに合わせて立ち上がる。

「そんなお小遣いなんて。でも、私と半分ずつならなんとか小さい頃には、よくお互いのお小遣い出し合っただけのものを買って、分け合っただけの食べ物だ。私はそれを思い出しながら提案する。」

「じゃあ半分にしよ。小さい頃みたいだね」

カヨも私と同じことを思い出したらしい。

無邪気な笑顔で私の手を引いたカヨは再び人ごみの中へ入ろうとする。久我君といた最初のような不安はなかった。

私は今度ははぐれまいと彼女の手を強く握る。その手もまた私の手を強く握った。

そうだ、この気持ちはさっき止まっちゃったものと同じだ。それがまたゆっくりと前進を始めたんだ。その目的地は全然違うけれど、確かにさっき私の胸から消えたものと同じだ。

私を進ませるゼンマイを巻いて、そのうえ方向転換までさせたのは、他でもない私の幼馴染だった――。